

◆Selected introits from Leipzig 49/50(1558)

Recent Researches in the Music of the Renaissance, Volume LIX

2階にある叢書楽譜で普段みなさんの目にあまり留まらず、関心もひかない楽譜資料をご紹介します。幅広く学んでいただきたいので、ここにいる間に様々な資料に触れて、教会音楽の幅を知識面でも広げてほしいからです。

この楽譜は簡単に述べますと、タイトルの通りイントロイトゥス集—入祭のための音楽で、時代が1558年ですから多声合唱曲集、そしてプロテスタントの教会音楽です。

宗教改革後のルター派の音楽史料のなかで最も重要な、そして大規模な源泉史料で MS Thomaskirche 49/50 という文献番号を持ちます。内容は243曲のラテン語テキストを持つミサ曲、マニフィカト、モテット、コラール編曲など、作曲家はクレメンス・ノン・パパ、ハインリッヒ・イザーク、ルードヴィヒ・ゼンフルなど、当時の大作曲家たちです。そのなかから入祭に演奏されるものを選集にしたのがこの楽譜です。ラテン語でしかもミサ曲というジャンルを含むということはカトリックでは？という疑問をお持ちのかたもおられるかもしれませんが、ルターの宗教改革は拙速にすべてをドイツ語に自国語化したわけではありません。入祭はかなり後の時代までラテン語による歌が用いられていました。そして曲の冒頭はグレゴリオ聖歌の発唱部を先唱する形を踏襲しています。皆さんもよくご存じの *Rorate caeli, Puer natus est, Ecce advenit dominator* などが教会暦順に配列されています。音楽の美しさは同時代のカトリック教会と同じです。やがてバッハのカンタータのようなドイツ語によるすぐれたジャンルが発展してきますが、それまでのよき伝統をじょうずにひきつぎながらルター派は独自性を展開していきます。

◆浅井寛子「Ad te levavi—グレゴリオ聖歌のための前奏曲集～待降節・主の降誕」

もう一冊、目に留まりにくい楽譜を紹介します。グレゴリオの家から発行された、グレゴリオの典礼から生まれた曲集なのですが2階の棚にあるため利用される機会がほとんどありませんでしたので下のオルガン楽譜の棚に配架します。待降節から降誕の日中のミサまでに歌われる聖歌に基づくオルガンの短い即興、聖歌歌唱に導くためのイントネーションのアイデアを集めた典礼楽曲集です。グレゴリオの家の典礼のなかで実際に奏したものを楽譜に起こされたもので、演奏会用ではありません。即興はその共同体に即した演奏をその場で造っていかなくてはならないので、この楽譜がどこの教会でもふさわしいというわけではないことを念頭に置きながらお使いください。

(杉本ゆり記)